

なにと

先日、防災地質チームの研究員が月報原稿の所内決裁を受けた際に、文中の「など」と「等」の使い分けについて指摘を受けました。企画室を巻き込み、メール上でちょっとした論争になりました。学会誌への投稿原稿の査読で、どちらかに統一することを求められることもあるようです。以前に、私も日本道路協会の「道路土工指針」の改訂原稿を執筆した際に、名詞に続く場合には「等」を用い、動詞に続く場合には「など」を用いるように指定されたことがありました。

どちらを用いるのが正しいのでしょうか？ 公用文では取り決めがあるらしいとある幹部から助言をいただいたので、早速調べてみました。図書館に「例解文書実務—文書の取扱手続と公用文の作成要領—」（学陽書房）があったので、検索してみたところ、公用文では「等」を「など」と読むときには仮名書きし、「トウ」と読むときには「等」と漢字で記すと記載されていました。同音訓表（昭和23年2月、内閣告示2号、当用漢字の音訓を整理し、日常使用すべき読み方、書き方を定めたもの）によるとしていました。また、当用漢字では「等」は「ひとしい」もしくは「トウ」と読み、漢和辞典にも「ナド」の読みはありません。つまり、「など」と「等」は用法が異なるということです。

「ナド」の読みは、戦前の読み方であるらしいです。「など」を用いるようになったのは平安時代まで遡ります。「なにと」が転じて「など」になったそうです。源氏物語や土佐日記に既にその記載がありました。「源氏物語」は紫式部が執筆し、「土佐日記」も紀貫之が女性のふりをして書いているので、「など」と平仮名で書くのがひょっとしたら正当派なのかもしれません。

ちなみに同じようにひらがな表記する助詞は、「くらい（位）」、「だけ（丈）」、「ばかり（許）」、「ほど（程）」、「まで（迄）」があるそうです。日本語は難しいですね。

（防災地質チーム上席研究員 倉橋 稔幸）

\* \* \* \*

表紙左上記号 ISSN 2432-2652の説明

国際的なコード番号であるISSN (International Standard Serial Number : 国際標準逐次刊行物番号)は、ISSN ネットワークが管理する、逐次刊行物を識別するための固有の番号です。この番号は国立国会図書館ISSN日本センターから付与されたものです。